

わたしが突撃バカで、
あいつは狙撃バカ

クルスロット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

狙撃できない突撃バカが突撃できない狙撃バカの作ったミッションにマジギレする話

目次

1. 衝撃のファーストミッション
1
2. 撃滅のセカンドミッション | 13
3. 抹殺のサードミッション | 26
4. 反逆のラストミッション | 36

1. 衝撃のファーストミッション

ターゲットインサイト——視界に浮かぶターゲットサイトが一瞬、赤く染まり、また正常な緑になった。木々の隙間に居た標的である飛行ユニットは、わたしから逃れ、悠々と視界から消えていった。わたしは、また撃ちそこなった。そういうことだ。いや、そうじゃない。撃てた。トリガーを引く意志さえあれば、瞬時に、粉々にできたはずだ。

肩から力を抜いて、コントロールドッグリップから手を離す。わたしの愛機^{ウィザード}は、用意されていたビームスナイパーライフルを空に向けたままで、メインカメラも空を睨んだまま。

「……………毎度隠れてこそこそなにかやってたと思つたら、あいつ、ずつとこんなことしてたの？」

わたしは、ため息混じりに呟いた。毎度同じ言葉、ため息。信じらんない。呆れた。ほとほと呆れた狙撃バカだよ、あいつは。

辞めるなら辞めるで、もつと他にやることがあったはずだ。思い出づくりとかこう、色々だ。いくらガンプラバカで、ゲームに人生捧げたバカで、狙撃のことしか考えてな

い大馬鹿でもそれくらい思いついたはずだ。

空から焦点を視界に浮かぶタイマーへ向ける。カウントダウンする数値は、ミッションの残り時間を示している。まだまだ時間は、いっぱい。

なにせこの狙撃ミッションの制限時間は、三時間。三体の標的がランダムに、空を横切る。それを撃ち抜くのがこのミッションのクリア条件。さっきのが一体目。だから残り二体いる。

なんて思っていたら影が空の彼方に消えていった。もう見えない。油断するな、そういうことだろう。あいつのやれやれと首を振る顔が思い浮かぶ。瞼がぴくついた。

ちなみに、この狙撃ミッションは、1stミッション。手慰みに、スクロールしたミッション一覧を見て分かる通り、まだ2nd、3rdとある。

しかもこれをあいつは、クリアしている。ほんとバカだ。わたしは、口を尖らせ、一覧を指で弾いた。くるくる回るウィンドウは、コックピットの隅にぶつかって、エフェクトと共に砕けた。

プレイヤークリエイトのミッションを公開するには、まず自身でクリアしておく必要がある。クリア不可のミッションなんて、クソゲー極まるし、下らないからだ。

あいつは、寝る間を惜しんで、作って、最後の最後に送りつけてきた……。もつとこう……あるじゃん!?

「ばーっか!」

そう思うとわたしは、無性に腹が立って、リタイアを全力で殴った。勿論、あいつの顔に見立ててだ。だからグーパン。

十十十

「どうだった?」

「やっぱり狙撃は、向いてないです」

「君、いつも突貫してるしねえ」

「切り込み隊長としてやるべきことですし、性に合ってるので」

わたしのメイン機体は、〈ガンダムヴィダール〉。カラーを赤に、動力を疑似GNドライブに変えた以外は、元の〈ヴィダール〉とそんなに変わらない。強いて言うなら近接武装を多めにしている。ガッツソを流用して指先にビームサーベルを仕込んでみたりとか色々だ。

ビーム系の仕込み武器が欲しかったのとトランザムの出力増加が魅力的だったというのが主な理由。

嘘。トランザムって叫びたかった。でも〈ヴィダール〉も使いたかったからこうなっ

た。

「まあ、リオが切り込んで、炙れたのをあの子、エルアが撃ち落とす。それを僕が援護をする。それがうちの鉄板戦術だったからね」

ガンダムベースの喫茶スペースで、わたしと向かい合っているのは、わたしがGBNをやっていることを知っている二人の内、残った方だ。わたしの所属しているフォースのリーダー。メガネで温和。狙撃バカのあいつと突撃バカのわたしを纏められるのは、この人くらいいいじゃない。

ちなみにリオは、本名じゃない。アバターネーム。GBNとかこういうゲームやっているとリアルでもこっちで呼ばれがち。

「これ、わたしがやらなきゃ駄目ですか？ 途中で寝落ちしそうなんですよね」

「君の元送到られてきたんだ。君がやった方がエルアも喜ぶよ」

「嫌がらせですよ、これ」

「そんなことないさ。あの子は、君を高く評価してた。直接は、言わなかっただろうけどいつもいつも褒めていたよ」

「……直接、言ってもらわないと分かりませんよ」

「……全くだね。本当に、そればかりは、君の言う通りだ」

リーダーは、溜息をついた。深い深い溜息。会話の途切れ間、わたしは、頼んだカフェ

オレを冷めない内にと啜った。ああ、そういえばあの時もカフェオレだった。

今と同じように、わたし達のフォースに狙撃手が居ない頃、宛がなくどうしようかと悩む日々、あいつ、エルアが現れた。

GBNで、わたし達が鼻屑にしているカフェテリア。今日もメンバー募集は、空振り。今日は、どうするか話していたわたしとリーダーの間に割って入ったんだ

『狙撃手、欲しいんだって?』

気障ったらしい第一声だった。言葉自体は、大した何かがあるわけじゃないけれどどうにも口調、雰囲気、霧囲気が気障ったらしかった。どうして狙撃手というのは、どいつもこいつもこうなのか。どうしてロボットアニメの狙撃手は、高確率で、三木眞一郎なのか。いや、それは今関係ない。

茶髪で、片方刈り上げたアシンメトリーの女。なんかちやらちやらしてる。ぶっちゃけ好きじゃない。気に食わない。

というかりーダーだけしか見てねえ。わたしもフォースメンバーだぞ。こっち見ろ。おいこら。

『おつ、君狙撃手なの? いいね! 使う機体は?』

『勿論、デユナメ『寒気がする喋り方と服のセンス直してから出直して』——は?』

乗り気なリーダーとエルアの会話を叩き斬ったわたしに、あいつが向けた視線で、評

価がちよつと良くなった。なんだいい目をするじゃん。そっちの方がいいよ、絶対。

『な、なに、ゴホン……なんだ、テメエ……!!』

『このフォースのメンバーだけど？ あ、今の喋り方なら大丈夫。二度と寒気がする話し方しなければ入っていいよ。あーでも服装は直して。声帯三木眞一郎じゃなきや許されないよそれ』

『はっ、余計な世話だつての。誰がこんな迷惑失礼千万女がいるフォースに入るか』

『あ、逃げるんだ。まあ、芋砂されても困るし、良かったかな』

『だーれが芋砂だこのツインテール!! そもそもテメエはなんだよ、テメエは。テメエは何でできるんだよ』

『口で言うより早い方法あるでしょ』

『いーぜ!? やってやろうじゃねーの! おら! バトルスペースいくぞ! ボッコボコのギツタンギツタンにしてやるわ!! 泣いて入ってくれと土下座するくらいまで、ボッコボコにしてやるからな!!』

『ふくくん、楽しみにしとくね。まつ、わたしとい勝負できればフォース入り、認めあげなくもないかな〜』

『うーん……僕がリーダーなんだけどなあ……』

結論として、わたしとエルアは、五分五分だった。だからしゃーなしで、フォースに

入れてあげたってわけ。

「その挙げ句にこれかあ……」

「まあ、君にかっこ悪い所見せなくなかったんだろうね。あの子、そういうところあるから」

「馬鹿みたいに負けず嫌いで、馬鹿みたいに意地っ張りでしたしねえ」

「……まあそうだね」

「なんです。その生暖かい目」

「いや？ あっはっは。それで、どうするの？ 今日、止めにする？ そろそろ僕は、「もうちよつとやります」了解。ま、遅くならないようにね」

そう言い残したリーダーは、袋いっぱいH.G.を背中と両手に持って、ガンダムベースから出ていった。あの財力、羨ましい。なによりあのパワーがああ巨乳を支えているに違いない……羨ましい。

それからカップに残ったカフェオレを一気に飲み干して、わたしは、立ち上がった。

「やりますかあつ」

負けたままは、癩だしね。

「はっはあ!! わたしにかかれればこれくらい余裕なんだわっ! 悔し涙を垂れ流して、頭を垂れるがいいわ!!」

やっぱり、突貫突撃突破なんだよなあ……。わたしは、GBNにいた。挑むは、バトルロワイヤル。バトルロワイヤル専用にクリエイトされたこの一面の荒野には、無数のガンプラが蠢いて、鎬を削り、爆散している。

わたしは、このわちやわちやしたカオス空間が好きだ。好きだけ暴れて、好きだけ倒す。たまに倒されるから仕返しに帰ってくる。無限ループだ。

通りがかりの黒いザクIIをGNビームクロードで切り刻む! 熱したナイフで、バタールを斬るが如き所業! あまりにも脆い!

ぶっちゃけ言います。件のミッションの進捗最悪です。駄目だわ。ちよつと目を逸らしたらいつの間にか通り過ぎてる。ながら作業できないじゃん。きつすぎる。Vの者見ながらさせてほしい。もしくはRTA。

「こんなもん送りつけてきて……。絶対許さん。わたしは、絶対許さんぞ……。ばーっか!!」

『派手にやってるじゃねえかアッ!!』

「はっ! この特徴的なバーサークボイスは!」

なんて反応したと同時に振り下ろされてきたブレードに、フロントスカートから抜き出したハンドガンを合わせる。ガンカタしたさにブレードついたりスパイクついたりしたから強度は十分！ 多分！ 睨みつけてくるGN-XⅣの改造機、へオーガ刃-X。武闘派で有名な百鬼、そのリーダー、オーガの乗機。そうつまり！

『いつも通りふざけた特攻狂いだなア、おい！ 今日も噛み砕いてやるよ！』

「かー!! かー許せんばい！ めっさ許せんばい！ 今日こそは、白星つけてやるばい!!」

『……キャラが不安定すぎるだろ』

「急に、真顔にならないで頂けますかっ!?!」

あーやっぱへオーガ刃-Xのパワー高いんだよなー。わたしのへヴィダールが機動性に割いている分、正面からの殴り合いは、不利。まあ分かって正面から殴って来てるんだろうけどさ。あ、やばいやばい。押し潰される。

『んで、どうすんだよ?』

「——トランザム!」

使い所を誤らない！ 出し惜しみをしない！ トランザムは、そうやって使うもんだ！ とわたしは思う。拘束を抜けて、がら空きの背後に回り込んだわたしの目の前で、へオーガ刃-Xの粒子放出量も増大する。トランザムだ。赤い残像がブレードを引き

連れてくるのをわたしは、見た。

『来ると思ったぜえ!!』

「わたしもっ!!」

著しく出力を増す〈オーガ刃―X〉を前にして、

「ちゃんとトランザムで追ってきたくれるって信じてた!」

わたしは、トランザムを解除する。一見自殺行為だけど相手がトランザムの速度を乗せ、ブレードを横薙ぎしてくるのに合わせて、減速。足を地面から離し、後ろに倒れ込んで回避。

GNドライブの利点は、普通無理な体勢だとしてもこうして、浮かせてくれること!そして、ガンダムフレームの利点は、可動がよく運動性能が高い所! 間髪を入れずから空きの横っ腹へ両手のハンドガンを連射し、そのまま滑るように、〈オーガ刃―X〉の懐から離脱、体勢を立て直した。

『甘えエ!!』

「びいっ!?!」

――所に、正面から叩きつけられた衝撃に、視界と頭がぐわんぐわん。何?! 何が!? つんのめって転がる機体を立て直して、衝撃の方を向いたら転がっているのは、〈オーガ刃―X〉のブレード。投げたの!?! ウッソでしょ!

「ッ！ トランザム!!」

「ハツハア!!」

驚いている場合じゃない。起動コードを入力。再度へヴィ^わダール^たの粒子放出量が増大して、赤く輝いた。へオーガ刃―X[〓]がブレードを拾いながら迫ってきた。ハンドガンで、牽制——いや、今は！ 両手のハンドガンをへオーガ刃―X[〓]目掛け投げつける。次に、脚部マウントしてあるバーストサーベルを引き抜く！

「逃げるは恥！ わたしができることは、ただ一つ！ 突貫——」

『GBNの近接戦闘は、リアル[〓]の運動神経、反射神経が結構関係してくるんだ。俺は、お前が羨ましいよ。俺には、それが無いから』

——それ、今思い出すことか？ なんて思ってるわたしへ敗北は、無慈悲に突きつけられた。

ブレードがへヴィ[〓]ダール[〓]を膺[〓]切りにする。腕が肩ごと飛んで、返す刃とクロスに斬り裂かれた。

『……ふん』

オーガは、鼻を鳴らすと踵を返して、去っていった。次の獲物を探すんだろう。わたしは、あまりにも間抜けな結末に、しばらく立ち竦んで。

「くっそ」

呟いた——エルアが見てたらどう思うだろう。なんて言うだろう。

『なっさけな。めっちゃ笑えるんだが?』

笑った顔で、嘲った口調で、そう言うに違いない。

「いや、めっちゃムカついてきたな」

2. 撃滅のセカンドミッション

だけど怒りで、狙撃は、上手くならない。リーダーも狙撃は、いまいちで教えるのは難しいって言われた。なので、

『マギーさん、狙撃得意な人、教えて下さい!!!』

『うーん、突然ね〜!』

GBN名物のマギーさん。紫髪に、赤いジャケットのグッドルッキングガイ。初心者を導く愛の伝道者。初心者の頃は、わたしもかなりお世話になった。よくログインしてるからちよくちよく女子会したりもする。

『でも貴方って、近接メインで、遠距離戦しないでしょう? 急にどうしたの? 方向性変える感じ〜?』

『実は、ガンガンダムダムダムでして……』

『ザクザクジムジム。なるほどね〜! 分かったわ! そういうことなら任せて〜!』

『さっすがマギーさん！ 話が早い！』

『まっかせなさ〜い！ じゃ、アポ取れたら連絡するわね〜』

『は〜い！』

とお願いました。その場で、連絡。即オツケー。ルンルンで待ち合わせ場所に待機していたらその人はすぐにやってきた。

「君が狙撃を習いたっていうプレイヤーでいいかな」

「そ、そうです！ リオです！ よろしくお願います！」

ほ、ほんとにアヴァロンの制服だ……！ 流石マギーさんの伝手……!! 聞いてはいたけど目の前になると流石に驚くし、緊張する。

「俺は、ヒロト。見ての通り所属は、へアヴァロン。できる範囲でレクチャーするよ」

「うっす！ よろしくお願います！」

「えーつと……とりあえず狙撃ミッションをクリアしたいって聞いているんだけど、どんなミッションなの？」

「あ、こういうやつです」

ミッション内容をウィンドウに表示して、ヒロトさんに差し出した。どれどれと内容に目を走らせていくとヒロトさんの表情が少し険しくなった。うーん、やつぱさうい

反応するよねえ。

「君、普段は、どういう風に戦うの？」

「真つすぐ行つて、ぶん殴る。つて感じですね」

「……大体わかったよ」

「じゃあ、とりあえずレクチャーを……」

「いや、その前になんだけこのミッションさ」

わたしが出したウインドウをヒロトさんは、差し出して、

「狙撃、必須条件に入っていないんだけど。それでも狙撃のレクチャー受ける？」

そう尋ねてきた。

「……………へ？ いやいや、あいつがそんなことするわけ——」

ミッションの内容、必須欄を舐めるように、入念にチェックして……あ”っ……。

「先入観でした……」

「君の感じからして、そのミッションをクリエイトした人は、かなり狙撃に入れ込んでたみたいだね」

「まあ、そうですね……。わたしが突撃バカで、あいつが狙撃バカ。そんな感じですよ」

「なるほど。それで、どうする？」

「えーっと、その、折角集まってもらつて大変心苦しいんですが……」

めちやくちや申し訳ない。うわー……ほんとどうしよう。狙撃至上主義なあいつがこんなこと許すなんて、まったく思ってたから……。すごい言い訳だこれ。何がすごいって、言い訳になってないところ。

「良ければなんだけこのミッション、同行させてもらえないか？ 同行というか見学だけどうだろう。一応、アドバイスみたいなこともできるかもしれない」

一瞬で、快諾した。

十十

「専用の密林のステージに、転移。スタート地点も絶好の狙撃ポイント。しかもお誂え向きに、ビームスナイパーライフルが設置されている。狙撃好きのダイバーが用意したものだという事前情報があったら勘違いするかもしれないな」

「とか見学できるミッションだったんだ……」

次からは、ちゃんと要項読みます。はい……。

「まあ、今更だ。とりあえず上に上がってみよう。乗せてもらえるかな」

「了解です！」

〈ヴィダール〉を呼び出して、操縦席へヒロトさんを招き入れた。するとヒロトさんが

感心したように話し出した。

「ヴィダールの動力をGNドライブにしているのか。武装もいくつか変えている……腕、ガラツゾのか。なるほど。より近接特化したのとビーム兵器を導入して、フェイズシフト装甲への対策をしているんだな」

「ひと目でバレちゃうんですね。そうですね。ビームサーベルを持つより早いですし、そのまま殴ってもいいので」

「ツイン・リアクターシステムに比べると基本出力が下がるけどGNドライブの柔軟性のある動きとトランザムは、かなり魅力的だ。とてもいいガンプラだと思うよ」

「えへへ……。ありがとうございます」

こう真正面から真面目にべた褒めされると照れちゃいますね……ふへへ。

「ごめん。偉そうなこと言ってたな……。他人のガンプラを詮索するのも失礼だった」

「いえいえ、全然。めちゃくちゃ嬉しいです」

「……そうか。よかった」

会話の途切れ目を合図に、〈ヴィダール〉を上空へ。樹々を押し分け、空に飛び出ると一面緑が覆っている地上と青空が広がっている。ミッシヨン専用の空間だから他に人影や機影はない。だから飛んでいるのは、この〈ヴィダール〉。そして、このミッシヨン

の標的である飛行ユニットだけ――。

「……………えっ」

「これは……………」

飛行ユニット――だけじゃなくない？ 確かに三機いる。旋回している。空に上がると挙動が変わるのかもしれない。ただ、問題はそれじゃない。わたしとヒロトさんは、そのまだ上にいるものを見ている。

ズーム、ズーム、ズーム。拡大映像に、映っているのは、

「青い、ラフレシア……………」

「ラフレシアの改造機だと思う。大きい花卉の下に一回り小さな花卉がある。そうすると周りのユニットは、バグの改造か？」

「ちよつと丸っこいの見覚えある。あ、ハシユマルの……………なんでしたっけあれ。あれを元にしてるんじゃないですかね」

「プルーマか。なるほど。そうかもしれない。ところで、」

言葉の途中で、接近警告――予想通り、プルーマだ。三機同時に迫ってくる。飛行ユニットもこれだろう。

「……………やっぱ落とさないと駄目っばいですね」

「そういうことだろうね。いける？」

「やりましょう！ あ、ヒロトさん。ちょっと、いや結構揺れるんで気をつけてください
いね」

「邪魔にならないようにするよ」

肩を竦めるヒロトさんからブルーマ？に視線を戻す。接敵は、すぐだ。コントロール
グリップを握り締め、スラスターペダルを蹴り押す。バカみたいな加速がわたしの体を
後ろに引つ張り、前に押す。ブルーマとの距離も見ると、いやもうほんの一瞬で、ゼ
ロになった。この距離がわたしだ。

「猪突猛進ッ!!」

二対五指——GNビームサーベルを展開。接敵と同時に1体を斬り捨てる。ゼロ
だった撃墜カウンターが1つ増えた。これでいいんかい!!

『くつくつく……だからお前はバカなのだ。目先のことにすぐ囚われる』

「東方不敗かつーの!!」

あいつの声が聞こえた気がする。気の所為だ。幻聴だ。嫌になる。いい加減成仏し
てくれ。わたしの隙を突く相手を撃つたあいつは、大体こんなことを言っていた。ムカつ
く。けど分かる。だけどころ返さずには、居られない。

「君、大丈夫……?」

ヒロトさんの声が聞こえた気がする。ちょっと悪いけど無視しよう。

反転から次いで二機目、爆散。カウンターが増える。今までの時間を返せ。うっぶん混じりに3機目へ。乱射が来る。実体弾。あいつ製だからへヴィダールへの対処が仕込まれている可能性がある。回避だ。回避だ。回避して潰す。

途中まで、それでよかった。ブルーマの尾が分離して、襲いかかってきた。有線兵器だ。インコムとかと同じ。下らない。鎧袖一触。へヴィダールへのGNビームサーベルで、斬り落とす。

『だからお前はバカなのだ』

「同じことを、何度も何度も繰り返すなっ……!」

『目先のことにすぐ囚われる』

「そもそもあんたは、師匠でもなんでも無いでしょうが!! 狙撃手は、後ろにいるからよく見えてるだけでしょうが!!」

……前しか見てないのは、事実だ。内心ぶっちゃけ否定しづらい。だって、前ばかり見てるのが気持ちいいんだもん。後ろは、任せられる人に任せたい。だから、さあ! レールガンの弾幕を引きつけ、射線を逃れて、一気に斬り刻んだ。カウンターがまた1つ増えた——ミッションクリアが大きく浮かんだ。荒く息を吐く。肩が揺れる。GNでは疲れないはずなのに。

「君、本当に大丈夫か?」

「すみません。大丈夫です。ヒロトさん。この調子なら残りのミッションもクリアできると思います」

「そういう、ことじゃないんだが……」

「大丈夫です」

ヒロトさんの気遣いは、分かっている。幻聴相手に叫んでるやつなんてまともじゃない。わたしだって、そう言う。だからわたしは、そう言った。大丈夫だって。

だけどヒロトさんは、あまり納得していない様子。いい人だなんて思った。だから大丈夫です、とゴリ押ししようとした。差し伸ばされた手を叩き落とす所業。我ながら最低だ。

『2nd Mission Start!』

言う暇はなかった——操作をしていない。ならミッション側が時間経過での切り替えが仕込まれていたんだ。

直後、強烈な閃光が降り注いで、へヴィわたいダーたしル達を呑み込んだ。

十十十

空に居た青いらフレシアからの砲撃だった。機体名は、へブルーローズ。メガ粒子砲

を受けた〈ヴィダール〉は、一撃で、蒸発してしまった。馬鹿げた火力だ。

折角ヒロトさんに、レクチャーしに来てもらったのは、申し訳ないけどとりあえず自分で、できることでやってみようと思ったんだ。ただクリアしたら報告する約束をした。

「花言葉は、夢叶う、不可能、奇跡。後は、神秘的、不可能なことを成し遂げる。そして、」

「一目惚れ」

スマホの画面を読み上げるわたしに、コーヒーを片手に戻ってきたリーダーが口を挟んできた。ネットで、検索して出てきたのを読み上げていた。青薔薇の花言葉。わざわざあんな名前つけたんだから意味があるのだからかと思ったから。

いつものガンダムベース。カフェスペースで、これまたいつものように向かい合っていた。

「なんの花言葉か分かります?」

「え、あー……青薔薇」

「正解です。リーダー。もしかして、あいつのミッションのこと最初から知ってました?」

「どうして、そう思う?」

「ミッション内容を見せたのに、わたしの間違いを指摘しなかったこと。よくよく考えたらあいつがクリエイトしたには、ミスリードとかがやたら凝つてるところ。そもそもあいつは、ダブルオー大好き。せつかくのクリエイトミッションで、ラフレシアとかブルーマは、なんか違うなって……そこだけは趣味が合ったな………ムカつく。最後に、今の花言葉。まあ有名な花だけどパツと出てくるのはちよつと怪しいと思いた」

というか。

「リーダー、花よりガンダムじゃないですか」

「……はは、」苦笑いしたリーダーは、「まあ、うん。全部じゃないけどね」と頷いて、わたしの機嫌を伺うよう訊く。

「……………怒ってる?」

「ちよつとだけ……いや、結構? とりあえず、怒ってます」

「……………カフェオレでどう?」

「アイスクリーム倍乗せなら」

「かしこまりました……」

さて、どこから聞いたものか。なんて考えていると先に口を開いたのは、リーダーだった。

「あの子が言い出したんだ。GBNがやりたいってね」

「リアルの知り合いなんですネ、あいつ」

「まあ、ね。うん、知り合い。GBNで撮ったスクショとかプラモの画像見られちゃつてさ。前、こういう趣味隠してるって言ったでしょ？ もちろん職場でも隠してたんだけどね。だからそうちよつと負けちゃってね」

歯切れが悪く話すリーダーに、わたしは、つい苦笑を浮かべてしまう。わたしは、別にそういうのは無いけど隠したい人にとって、バレれてしまうのは、結構きつい事なんだろう。

「それで、最初あんな妙な小芝居を？」

「普通に入れるつもりだったんだよ？ でもあの子がしたいっていつてね？ しようがないからあんなあったんだ」

「……まあ、分かりました」

とりあえず、事情は、把握した。じゃあ、一番聞きたいことを聞いてみよう。わたしは、意を決して、口を開いた。

「なんで、あいつ急に辞めたんです？」

「……それはね」

コーヒを啜ったリーダーがいつになく真剣な表情を浮かべるから生唾を呑んで、わ

たしは、次の言葉を待った。

「ミツシヨンクリア報酬がその答えだよ」

「や、野郎ぶつ殺してやる……!!」

思わず口をついて出ていた。しゃーない。殺意が漲ってしまった。リーダーは、悪くない。あいつが悪い。間違いない。わたしは、自分に言い聞かせた。苛立つ。なんで苛立つてるんだろう。わからん。何で？ どうして？

——わたし、怒ってばっかだな。

実際、ムカついていたから。勝手に、黙って辞めた。そして、知らなかったのは、わたしだけ。これで怒らないほうがいい。わたしは、間違っていない。

「ごめんね」

「リーダーのせいじゃないです。悪いのは、あいつです」

体をすぼめて、申し訳無き気なリーダーに、苦笑いしてからカフェオレを呑んだ。

いつものカフェオレに、ソフトクリームをどんと乗せたやつ。甘い。ちよつと苦い。美味しい。落ち着く。ふうと息を吐く。

「まあ、とりあえずクリアします。これからは、飛んで、詰めて、殴ればいいだけですから」

笑って、力こぶを作ってみせる。余裕だ、余裕。

3. 抹殺のサードミッション

〃〃〃 一時間後〃〃〃

「チートもいい加減にしろお!!」

わたしは、コックピットの床をばたばた蹴りつけ。じたじたコンソールを殴っていた。かー!! なんなんの! なんなんの、このミッション!! 数えて三回、わたしは、コックピットでブチギレた。GBNのアバターの身体能力は、やろうと思えばいくらでもパワーを上げられる。そんな感じで暴れてた。びくともしない。流石だけ。全力で台パンできる。いや、そういうことじゃない。

「まあ、チートではないよね……」

ちよつと言い過ぎた。ごめん。居ないし聞いてもない相手に謝ってから深呼吸をして自分を落ち着かせた。それから新しく出現した2ndミッションの内容へ再び目を向けた。何度見ても内容は、変わらない。

1thミツシオンと同じ森の隙間、ビームスナイパーライフルは、1thミツシオンと同じものが置いたまま。空の向こうには、やっぱり目標がある。憎たらしい機械の造花。ラフレシアの改造機〈ブルーローズ〉が日差しを受けて、青く輝いている。

ミツシオン内容は、シンプル。〈ブルーローズ〉を落せ。

「……撃ち落せ、ってことだよね」

ビームスナイパーライフルが相変わらずあるってことは、そういうこと？ いや、無理でしょ。撃ち落とせなーいんだが？

「ラフレシアって、1フィールドとかあったっけ……」

あったわ。wikiにあつた。まあ、肉薄する前に、メガ粒子砲雨霰で爆散してるんだけど。トランザムで突っ込む？。うーん、雑に撒かれたメガ粒子砲と拡散ビーム砲で、消し飛ぶのが早くなるだけになりそう。下からに強すぎでしょ。そういう風に住ったんだろうけどさ。いくらナノラミネートアーマーがあつてもあの密度のビーム放射には、フレームだとかが耐えられない。

「1フィールドあるならこのビームスナイパーライフルも駄目じゃん……」

1フィールドあつてもなくても一撃は、無理そう。しょぼげだしなあれ。使つてないけど。

「しっかし、あいつどうやって落としたんだ？」

狙撃脳だし狙撃しかできないって、事あるごとに自虐してたしなー。それは間違いないんだけど……駄目だ。何も分からん。

「取っ掛かり見つけたいな……」

このまま諦めて落ちるのは、簡単だけど何かなあ。ぼやいてから〈ヴィダール〉を仕舞うと地面に転がった。短い草が柔らかくて、気持ちいい。気候もいい感じに暖かい。眠くなる……。空をぼーっとしばらく眺めて、前髪をなびかせた風を受けてからふと思った。

「そっさいえば……」

周り見てなかったや。立ち上がって、森の方に踏み出す。今度は、時間制限が無いんだからちよつと見て回ろう。

十十十

「なんかあった」

開けた森の空白地帯、というかなんだらう。樹々が生えてたところをふっ飛ばしたみたい。緑も途絶えていて、地面が剥き出しだ。その真ん中に突き刺さってる。……爪楊枝みたい。いや、爪楊枝じゃないけどさ。黒いし。そういうことではない。

「これ、ダインスレイヴだ」

遠目みると遠近感狂うよねー、これ。開けたところに、ぼつーんと突っ立てるしき。長い、でかい。見上げるとやつぱすごい。これが大気圏外から降ってくるんだから鉄血本編は、やってらんないよ。

それでも立ち上がるのが〈バルバトスルプスレクス〉。痺れたねえ。

「ま、わたしが使ってるの敵側だけど」

〈ヴィダール〉は、徹頭徹尾、鉄華団の敵であるギャラルホルンだった。でもかつこいと思ったからわたしは、今、こいつに乗っている。

しかし、このダインスレイヴなんだ？　なんでこんなところに？　怪訝と周りを見ても深い森。だったらやつぱり空だ。青い空を見上げれば一番目立つ〈ブルーローズ〉がある。

「え、もしかして、ダインスレイヴ撃てるの？」

えくく……コワー……。鉄血要素入ってるもんねえ。撃てるかもしれない。これほんとに詰めて殴れるの？　少しイライラしてきた。溜息が出る。

「ムカつくなあ……」

とりあえず、ここにダインスレイヴが残っているってことは、ここに撃ってきたってことかな。でもなんで撃たれたんだらう。普通にうろついても〈ブルーローズ〉は、

撃つてこない。メガ粒子砲をばら撒かない。静かに浮いている。

「手を出せば撃つてくるのかな」

まだ〈ブルーローズ〉を狙撃していない。〈ヴィダール〉のライフルでは、届かないからあのビームスナイパーライフルをいい加減、あれに撃つてみるべきだけだ。

「返しに、多分だけどダインスレイヴが来る」

……かも。メガ粒子砲かもしれないけど。まあ、そもそもあのビームスナイパーライフルでは、Iフィールドは破れない。

「……地形は、深い森。それを撃ち抜いて、突き刺さったままのダインスレイヴ。これ見よがしに置かれたビームスナイパーライフル」

答えが見えたかもしれない——本当に、全くもう。わたしは、大きく大きく溜息を吐いてから、

「ムカつくなあ」

小さく毒づいた。

——正直なところ、もっと楽な方法はあったと思う。

ビームスナイパーライフルを掻き消すIフィールドが存在するのは、テストして分かった。手酷い反撃が〈ヴィダール〉を消し飛ばした。

〈ブルーローズ〉は、手を出さなければ——つまり、ロックオンするまで——浮いてい
るだけ。ならIフィールドを無視できる火力を用意すれば容易に落とせたはずなんだ。
もしくは、Iフィールドをすり抜ける物理的な狙撃。それこそダインスレイヴ。ダイ
ンスレイヴを〈ブルーローズ〉は、結局撃つてこなかった、あれは、ダインスレイヴを撃
つてというヒントだったんだ。

「だけどき。全部が全部、示された攻略法に乗っかるのは、ムカつくもんな」

〈ヴィダール〉を操作して、握ったワイヤーを引っ張った。このワイヤーは、設置して
あったビームスナイパーライフルのトリガーに繋がっている。逆シャアでみたやつだ。
正直なところ宇宙世紀は、映画しか見てない。

「トランザム！」

ビームが空を突き進むのを見たのよりも早くわたしは、叫んでいた。ワイヤーを引く
のと同時くらいだ。

〈ヴィダール〉が赤く輝くのがわかる。スラスターペダルを踏み込んでいる。加速。
地上と森が一瞬で、遠ざかった。代わりに、〈ブルーローズ〉へと近づいていく。一撃で

仕留める。内心で呟いた。

ビームスナイパーライフルの元に、〈ブルーローズ〉のメガ粒子砲に拡散ビーム砲が降り注いだ。森が土煙と一緒に、削られていく。少しの間、ビームは、空に伸びていたけどあつと言う間に見えなくなった。

ナノラミネートアーマーは、ビームに対して絶対的な優位性がある。動力のエイハブリアクターから発生するエイハブ粒子と装甲に散布した金属塗料の反応がビームを無効化する——というのが鉄血本編の設定。

結論から言うとなたしの〈ヴィダール〉は、完成度が足りていない。普通の〈ヴィダール〉としてなら問題ない。けどGNドライブに動力を切り替えているのもあって、エイハブリアクターという動力を必要とするナノラミネートアーマーを完全に再現できていない。だからあの大出力には、耐えられない。

「でも、当たらなければどうということもないってさあ——!!」

〈ブルーローズ〉の花弁、ブルーマが展開される。遅い。それを横目にしながら猛スピードで追い越して、〈ブルーローズ〉の真上に到達してから片足を振り上げる。ハンターエッジを振りかざす! さあ、いこうか!

「チエストオオオツツツツツツツ!!」

気合一閃! 確かな手応えとミッションコンプリートのシステム音声わたしに、勝

利の確信をもたらした。

——N e x t, l a s t M i s s i o n S t a r t!
そうして、最後のミッションが始まった。

「なるほど。最後はそう来るわけ……!!」

地上から差し込まれたビームをどうにか回避——いや、ちよつと掠った。トランザムを解除する。弱体化した後だとカモにされてしまう。それだけは避けたい。あの狙撃を前にして、無様を晒すなんて腹立たしい。

圧縮されたGN粒子の輝きは、綺麗なピンク。間髪を入れずに放たれる直線は、その色をしている。

本家大本。ヴイわダールしのGNドライブは、疑似的なもの。だからビーム光は、オレンジだ。

「ああ、この動き——先読み、あいつのだ……!!」

本人ではないと思う。あいつは、GBNにいないのだから。だったらプログラムされたクリエイトミッション用のもの。デジタルに、行動を決められている。

しかし、わたしの癖を知っている挙動。ああ、あいつのライフルだ。いつも背後から感じていた視線を全身に感じている。わたしの周りの敵機の挙動を見張る鷹の目が、わ

たしを落とそうと見ている。デジタルな殺意がわたしを突く。

ゾクツとする。たまらない——だけどこれは、本物じゃない。

「本物を超越せよ……!!」

噛み締めた歯を軋ませて、わたしは、眩く。偽物じゃ嫌だ。あんたは、今、どこにいる。

「そこだつ!!」

わざと粒子ビームを受ける。食らってはいない。GNフィールドだ。捕まえた。逃さない。ならやつぱりここはっ!

「トランザムツ!!」

叫び、加速。空から地上へ。狙撃をGNフィールドで対応する。加速と重力を受けたわたしが地上へ到達するのは、一瞬。わたしの世界が後ろに、伸びる——着地。砂煙を巻き上げて、視界に映ったのは、ウツドランドバスターン迷彩のヘケルディム。

「これで、」

GNビームクローを開放し、指を揃える。ヘケルディムがGNビームライフを投げ捨て、GNハンドガンを引き抜く——いや、抜かせない。肩から腕を落とすとGNハンドガンごと腕が転がった。振り上げた両手先の狙いを瞬時に固定。狙いは、勿論!

「終わり!!」

『All Mission Complete!!』
コックピット!!

4. 反逆のラストミッション

「はい、ついたよ」

「ありがと、リーダー」

クリア報酬として、一通のメッセージが届いてた。載っていたのは、位置情報と待ち合わせの店名、後、クリアおめでとうだけ。もつと他にあるでしょうが。まあ、いいか。直接聞いてやる。直接キレてやる——なんて肩怒らせて来たけどちよつと萎えた。アバター通りにしてよ、もう。

リーダーの軽自動車から降りて、ぐつと体を伸ばす。座ってる時間が長かったからちよつと背中が心地よく鳴るのを聞いてから周囲を見回す。この辺に来るのは、初めてだ。

あいつ、意外に住んでるところ近かったな。ここのガンダムベース、来るの初めて。中見てみたいな。

「んじゃ、僕は、中でガンブラ見てくるねー。あの子、そこの喫茶で待ってるって」

「え？　一緒に来てくれないんです？」

「まあまあ、若い子同士、積もる話もあるでしょ？」

「いや、そんな……居ないし……」

しゃーない。肩を落としたわたしは、ガンダムベースに背中を向けると道路を挟んだ向かいにある喫茶の方に向かった。

「……おしゃれじゃん」

実際この辺り、かなりおしゃれ。歩いてる人達の服とかめっちゃおしゃれで可愛い。ガンダムベースの隣の雑貨屋気になる。後で行こう。こうなるとガンダムベースめっちゃ浮いてるな……。まあいつか。とりあえず入ろつ。

「いらつしやいませー。お一人様ですか？」

定員さん可愛つ！　制服も——あ、これザフトレッドモチーフ？　ガンダムベースが目の前にある理由が少し分かってきた。

「いえ、待ち合わせをしていて……あ、見つけました」

「では、ごゆっくり」

定員さんに会釈をしてから写真で見た顔の座っている席へ。ここに来るまでに、リーダーのスマホで見た写真そのまま。これのお陰で、勢いを殺されてしまった。アバター通りの見かけ、性別つてのは中々ないけどさあ。

「あんたが、エルアでいいんだよね？」

「わあ……」

どすんと座った向かいの席にいた制服姿に、メガネとおさげの女の子——つまり、エルアは、わたしを見て、目を丸くすると。

「GBNと一緒だ」

「あんたは、違いすぎでしょ」

「まんまの方が珍しいからね……!?!」

そう言い返して、返ってきた言葉にわたしは、思わず吹き出した。それは、確かに。それで、なんでやめたの。GBN」

「直球だなあ……。えー、ケーキとか頼まなくていいの？ ここのモンブラン絶品だよ？ チョコレートケーキもかなりいける。好き。食べない？ 食べようよ。ね？ カフェオレも美味しいよ？」

「……カフェオレは、後で飲む。だから、ほら？ 問題は、最初に片付けておきたいって思ってたさ」

「え〜……私だって、心の準備がさ……ね？」

「キャラが違いすぎて、調子狂うんだけど」

「オンゲで、ロールプレイなんて普通だよ……。GBNだと結構いるよー？ なん

にも変わらない君の方が珍しいって」

「そう？ わたしは、そのカフェオレに、モンブランをじっくり味わいたいの」

「ぐ、強情……！」

「ほら、ね？ あ、そうだ。わたしが注文して届くまでに言うとかどう？」

「へ?! いや、そういうのは、ちよつと……」「すみませーん。カフェオレとモンブラン
お願いしまーす」話聞いてる……!?!」

「はい、どうぞ」

「え、ええ……!?! ってこれもしかしてクリエイティブミッションの仕返し?!」

「そうだよー。そうだぞー。そうなんだよー」

なーんて言っつて、にっこり笑っつてあげる。いやもう苦労させられたんだからこれくらいしてもバチは当たらないと思うんだよね、わたし。なんかごによごによして。そんなに言いにくいこと？ まあ、あんなもの用意したくらいだしねー。なんだから。

「……青薔薇の、花言葉は？」

「へ……? ああ、なんだっけ 夢叶う、不可能、奇跡。後は、神秘的、不可能なことを成し遂げる……もう一つあったような……なんだから……なんだっけ？」

「——れ」

「? 何？」

よく聞こえなかった。なんて言ったんだらう。わたしは、眉をひそめて、首を傾げた。

「——惚れ」

「？」

「二目惚れつ!!!」

GBNのアバターと似てもつかない可愛い女の子は、顔を真赤にして、立ち上がるとそう声を上げた。結構驚いた。そんなに声出すことだった？ わからん。

「二目惚れ」

「そう!!」

「……とりあえず、座りな？」

「へ、あ、うん……」

店内中から向けられてる視線に気づいたエルアは、小さい体をもっと小さくして椅子に座り直した。真つ赤な顔のままアイスココアをストローから啜ってる。そう言えばGBNでもココアばつか頼んでたな。そこら辺は、ロープレしなかったんだ。好みが可能い。

「それで、二目惚れって、リーダーに？」

「リーダーは、ただの先生。私の学校の歴史の先生なの」

「……だから宇宙世紀好きなの？ リーダー」

「さあ、どうぞ。卵が先か鶏が先かって感じ」

「ま、まあ、いいや。んで、一目惚れって、誰——」

——うちのフォース。三人しかいないよ？ え、嘘。まじで？ まじ？

「……わたし？」

「人生初の告白が非常に情けない告白になってしまった……」

ごつんとテーブルに、エルアは、額をぶつけると「うおー……」と唸り始めた。目の前でつむじとおさげが左右に揺れてる。

「あー、マジなんだ……」

「ゲームで出会った人に、マジ惚れするとかしかもキャラを見て、一目惚れするなんて普通無いじゃん……。痛い人だよ……」

「ゲームのAvatarに、一目惚れは、確かに……」

うぐう……！と元の位置に戻りつつ合った頭がまたテーブルとお見合いした。痛そう。

「単純に顔が好きになったんだ。けどね一緒にゲームしてる内に……その、ね？」

「マジになってた？」

ちらつと見て、頷いた。ああ、わたしも顔が熱くなってきた。どうすんだこれ。どうするんだよこれ。収集の付け方が分からない。リーダー！ 早く来て！！ ヘルプ！

ヘルプミー！

「マジになりすぎてどうにかなりそうになったからGBNも辞めました。でもなんか黙ってやめるのは、流石に私もどうかと思って……。後、なんか逃げた気もして……」

「あのミッション？ 流石に性格悪いでしょ。後、辞める言い訳も色々あるでしょ」

「後半は、向かい合ってるのが辛くて、結構限界で……。それは、その……。ごめんなさい」
やつと顔を持ち上げたエルアは、非常に申し訳無さそうな顔をして、アイスココアを啜るとほつほつ話し出した。

「好きだけどもあんまり伝える気はなかったし、ミッションもあんまりクリアさせる気なかったし。あれ狙撃できるなら私いらなくない？ ふええ……。帰る場所があ……」

……。なんか齟齬がある気がする。わたしとエルアの考えてるミッションなんか違う。

「ヒントそこら中にあつたよ？ ダインスレイヴとかビームスナイパーライフルとか。ていうか狙撃縛りとかなかったし」

「え!?! 私、そんなの置いてないん——リーダーああ!! 余計な真似をお……!!」

あーなるほど。大体わかった。頭を抱えて妙な声を上げながらじたばたするあいつに、ご愁傷様だと苦笑いが浮かんだ。

「全部吐いてしまった……。スッキリしたし、ま、いいかなあ……」

「んで、どうするの？」

「どうするって……?」

「戻ってくるんでしょ? もう吐いちちゃったんだから関係ないじゃん」

「そ、そういう問題じゃない!!」

「どういう問題だ……? 分かんないな……。どうやって説得しよう。後衛居ないのいい加減、シンドいんだよな。」

「ていうか、告られといて反応微妙じゃない!? もつとこう……あるでしょ……!」

「え、ええ……」

んなこと言われてもなあ。わたしは、ぼりぼり頬を搔いて、モンブランを一口。うわ、めっちゃ美味しい。カフェオレを一口。これも美味しい。ここまた来よ。

「いや、だつてさ」

「だつて……?」

「タイプじゃないんだよね」

「ごっ……」

また額をテーブルにぶつけた。絶対痛いやつ。音がもろにそう。あれはやばい。

「お、お客様!」

「あ、大丈夫です。大丈夫です。気にしないでください」

「は、はあ……」

困惑している定員さんに、愛想笑いを返した後、突っ伏したままのエルアに、わたしは、話しかけた。

「そりゃほら、GBNのあんたしかわたし知らないわけだしさ。なんていうの？　こ
う、親密度アップイベントが無いじゃん？」

「……つまり？」

「戻ってきて、スナイパーやってよ。またわたしの背中守ってよ」

「ううー……やっぱそうなる？」

「そうなるよ。今度は、アバター、リアルよりにしてよ。今のよりよっぽどいい」

「……まじ？！」

「まじまじ。アバターより今のエルアの方がいいと思うよ、わたし。ロープレより断然好き」

「口説かれてる……？！」

「ここは、押す！　強く押せばなんか流せそうだし！　押し押しだ！　イケイケドンドンって感じ。ほら、迷ってる。惚れた腫れたは、まあこの際いい。戻ってきてさえ貰えば後でもなんとかなる！　ぐつとテーブル越しに距離を詰める。顔と顔を近づける。

「あんた、居ないと物足りないしき？　ね？」

「……わかった」

よし！ 勝った！ 第三部完！ わたしは、テーブルの下で、小さくガッツポーズをして……ん？ あれ、どうしたのその目。おーい、据わってますよ。怖い。いや、怖い。

「覚悟、決めた」

「なにの……？」

「バトルで負けたら大人しく戻る。リアルモチーフのアバターにもする」

「あれ？」

「だけどわたしが勝ったら彼女になってもらう。アバターは、勿論あのまま」

「うん？」

「その条件なら戻ること考えなくもない!!」

立ち上がって、ビシ！ とエルアが指を突きつけてきた。……店内中の視線に負けて、座り直すのがなければ完璧だったと思うよ。

「ふうん、上等」

モンブランの栗をすくって、口に放り込んで、もぐもぐむしやむしや——ああ、そうだ。わたし、怒ってたんだ。思った以上に可愛い女の子がいて、告白なんてされたからちよつと忘れてた。

つーかなに勝手に条件つけてんのさ。こつちからわざわざ譲歩したげてるのにさ。

「やってやろうじゃないの」

勝手にこじらせて、勝手に出てったこいつに、どこまでも自分勝手なこいつに、わたし結構怒ってます。

「……あの、怒ってる?」

「察するのが遅い」

ギツタンギタンにしてやる。

十十

「……普通トランザム特攻がかぶるとかある? おかしいでしょ」

「……知らないよ、それにもう何回目? ほんともう……あんなに射撃外すなんて屈辱……」

「ま、あんたの助言のお陰だね。敵に塩を送ったことを後悔するといいよ」

「何の話だよ。ていうかやっぱスカートスースーする。やめちゃだめ?」

「制服スカートだったのに今更でしょ。だめ」

「気分的なやつだよ。GBNでは、強強モードだったんだから。ねえ、リオ」

「なに?」

「手、繋いでいい? ロビーにコレで出るの初めてで、ちよつとね?」

「ただのアバターじゃん……。誰も気にしないでしょ」

「気分的な問題なの……。！ だから、ね？ ほら？ カフェオレ奢るから！」

「まったくもう。エルアは、ほんとに仕方ないなあ」